

児童の話し合い場面における コミュニケーション・モデル構築の試み

仮屋園 昭彦*・丸野 俊一**・綿 巻 徹***・高 橋 豪****

(2004年10月19日 受理)

A Trial of the Communication Model Construction in Children's Discussion Process

KARIYAZONO Akihiko・MARUNO Shunichi・WATAMAKI Toru・TAKAHASHI Gou

要 約

本研究では、小学校6年生の児童に継続的に話し合いを行ってもらい、話し合いの発話連鎖についてのモデルを作成した。そしてこのコミュニケーション・モデルを児童の洗練された話し合いの指標とする。また、モデル化の過程で、話し合いにとって中核的な発話連鎖を把握した。モデル化の過程、および話題の終了の仕方、個々の発話機能の分析から、中核的な発話連鎖として重要な発話は、先行発話を受けとめる機能、および結論や合意を次へつなげる機能をもつことが明らかになった。この2種類の発話機能は、共通理解形成の土台となる機能をもつ。この意味で本研究によって、洗練された話し合いの条件としての共通理解へと至る微視的過程の把握を行うことができた。

キーワード：児童の話し合い、コミュニケーション・モデル、発話機能

問題と目的

近年、対話と協同作業にもとづく学びのあり方が注目されている。ここには、学びが人と人とのやりとりにもとづいて成立するという学習観がある。こうした学習観のもと、学びのあり方としての話し合い、議論が注目されるようになった(仮屋園, 2001b; 仮屋園, 1999)。

話し合い、議論研究においてこれまで俎上にのせられたテーマとしては、まず議論の技法分析があげられる。ここでは洗練された議論が展開していくための議論過程の分析(丸野・生田・堀,

* 鹿児島大学教育学部

*** 県立長崎シーボルト大学看護栄養学部

** 九州大学大学院人間環境学研究院

**** 宮崎県警

2001; 綿巻・中村, 2001; 仮屋園・丸野・加藤, 2001), 特定タイプの発話(質問行動, メタ認知的発話)分析(丸野・堀・生田, 2002)を行っている。また, 議論技術の向上を目指した研究としては, 議論訓練法の開発研究(丸野・加藤, 1996), 議論体験の学習効果(仮屋園・川野・綿巻・丸野, 2004; 仮屋園・丸野・加藤, 2002), があげられる。さらに, 議論を行う集団そのもののタイプの違いが議論過程に及ぼす影響を検討した研究(仮屋園・丸野・加藤, 2002)もなされている。

議論研究は, 近年盛んになった領域であり, 現在は, 個々の研究において基礎的データが蓄積されている状態にある。そこで今後の議論研究においては, 議論過程を包括し, 特定の視座, 切り口をもたらすような理論的枠組みが必要になってこよう。議論過程は, 柔軟性, 力動性, 変容性に富む現象である。したがって, 従来の研究で用いられてきた明確な予測性をもたらすモデルは, 議論現象にはそぐわないと言える。仮屋園(2004)は, こうした議論の特性を含んだ理論的枠組みとしてオートポイエシスを取り上げ, この見地から議論過程を捉える試みを行っている。こうした議論現象を捉えるための枠組みを提供できるような理論づくりは焦眉の課題であると言えよう。

これらの研究は成人を対象とした研究であったが, 学校場面での児童を対象とした議論(話し合い)研究も, 議論に関する学習環境の開発という面から行われるようになった。この領域では, 主として話し合いを中心とした授業分析(出口・真田, 2001), 発話分析(藤江, 1999; 生田・丸野, 1999)が行われている。

児童を対象とした議論(話し合い)研究は, これまで主として, いわゆる単式学級を対象とした研究がなされてきた。こうした現状のなかで, 仮屋園(2003)は特認校指定を受けた複式学級の話し合い過程を分析している。特に複式学級は負の要素として捉えられがちであり, その学習環境をめぐる議論も閉塞的な状況にある。同時に複式学級を含めた小規模校を有する地域での学校教育においては, 複式学級がもつ新しい学びの可能性を探る試みは今後重要性を増すと言える。

議論(話し合い)をめぐるこうした研究動向を踏まえ, 本研究では, 児童を対象とした話し合いのコミュニケーション・モデルの構築を試みる。具体的には, 児童に継続的な話し合いを行ってもらう。そして, その話し合いの変容過程, 洗練過程から中核となる発話連鎖を浮き彫りにすることでコミュニケーション・モデルを構築する。

こうしたコミュニケーション・モデル構築の意義は以下の点にある。第一の意義は, 中核的な発話連鎖のモデルは話し合い学習においてめざすべき目標としての基準となりうる, という点にある。したがって, こうした基準としてのモデルと実際の話し合いのありようを比較することによって, 現前の話し合いがどの程度の洗練性, 熟達性をもつのかを判断することが可能になる。こうした目的のため, 対象とする児童は最上学年である小学6年生とした。

第二の意義として以下の点を指摘できる。すなわち, 継続的な話し合いのなかで無駄な発話は減少し, 共通理解の重要性が認識され, 結果として話し合いのありようは洗練されていくであろう。モデル構築の過程で, その変容過程の実相を把握することができる。この実相の変化から, 話し合い体験によって児童が何を学び, 身につけていくのか, という点を具体的に読みとることができる。

これらの意義のもとに、本研究では、事例研究のかたちで、6名（男子3名、女子3名）からなる班に、継続的に3回の話し合いを行ってもらい、その変容を分析対象とする。本研究が単一事例を対象とすることの一般性、普遍性に関する考察は、仮屋園ら（2001）で行っているのでここでは繰り返さない。従来行われてきた仮屋園らの一連の事例研究、および本研究、今後の研究のなかで一貫して生じる、再現性、安定性のある現象を、普遍性のある現象として扱っていく。その意味で、結果については、従来の仮屋園らの事例研究と本研究を踏まえながら、拙速にならず、慎重に事実の集積を行ったうえでの判断が必要であることは言うまでもない。

次に本研究で扱う課題を Figure 1 に示す。この課題は、集団成員に話し合いで10個の選択肢のなかから5個を選択してもらおうという、協同問題解決型の議論である。さらに本課題は、仮屋園ら（2004）で使用した意見集約型課題である。コミュニケーション・モデル構築のために意見集約型課題を用いる必然性は以下の点をあげることができる。

これまで、仮屋園ら（2004, 2002）で明らかになったことは、仮屋園らで使用した情報統合型課題は、ある特定方略を用いると円滑な議論が展開され正解に到達できる、ということと、同時にこの特定方略は情報統合型課題の構造特徴から成員の間に必然的に発生してくる、ということであった。さらにこの特定方略は、他のタイプの協同問題解決型議論を円滑に進めるうえにおいても普遍性と有効性をもつ、ことが確認されている（仮屋園他, 2004, 2002）。この方略を仮屋園ら（2004, 2002）は一般協同問題解決方略と命名した。こうした点から、この課題を体験することが学習者に協同作業で有効な方略（一般協同問題解決方略）を獲得してもらうための学習方法として有効である、という情報統合型課題の意義が導出される。

さて、上記の一般協同問題解決方略として明らかにされた、話し合いの洗練性を高める方法とは、個々の話題について成員が共通理解を得ながら、その共通理解に基づいた結論を蓄積することによって話し合いを展開していく、というものである。そして、この共通理解に基づいた結論の蓄積が円滑な話し合いの展開のためには非常に重要な意味をもつことが情報統合型課題を用いたこれまでの研究から明らかになった。

こうした見解を受けて、本研究では、特に共通理解の蓄積が話し合いの洗練性を決定づける課題を用いることとする。共通理解とそれに基づく結論の蓄積が話し合いの展開を左右する課題は意見集約型課題である。Figure 1 にみられるように、この課題は10個の選択肢から5個を選択し、順位をつける必要がある。この課題は、各成員が共通理解のもと、合意を形成しながら結論を蓄積しなければ解決できない。

そこで本研究では、共通理解を話し合いの洗練性の基本においたコミュニケーション・モデルの構築を目指す意味で、意見集約型課題を用いることとした。共通理解とは、ほとんどすべての話し合い、および協同作業における基本方略である。したがって、共通理解を基本方略とする課題を用いたコミュニケーション・モデルの構築は、それだけ高い汎用性をもつと言える。

(第1回)

みなさんは、旅行中にジャングルに迷い込んでしまいました。これからジャングルを脱出しなければなりません。いま、みなさんの手元には、下に挙げてある10この道具があります。この10この道具のうち、ジャングルを脱出するために、5この道具しか持っていくことができません。どの道具が必要だと思いますか。みなさんで話し合い、意見をまとめて、各班で必要と思われる順に道具を5こ選び、さらにその5こに順番を付けてください。その理由をワークシートに記入してください。

ロープ ナイフ 懐中電灯 地図 腕時計 テント カップ
方位磁石 ライター 救急箱

(第2回)

ある日、みなさんは魔法のランプを見つけました。この魔法のランプは、みなさんの願いごとを5つだけ叶えてくれます。下の10この願いごとがあります。この願いごとの中から、みなさんで話し合い、意見をまとめて、各班で一番叶えてもらいたい願いごとを5こ選び、さらにその5こに順番を付けてください。また、その理由をワークシートに記入してください。願いを叶えてくれる時間は15分しかありません。みなさん急いでください。

病気になる 天才になる 空を飛べる 大金持ち 動物と話せる
死なない 瞬間移動ができる 人の心が読める 時間を止められる
どんな国の言葉も話せる

(第3回)

今、あなたは、沈没した船からボートに乗って逃げている最中です。一番近い陸地にたどり着くには最低1ヶ月の漂流が必要です。ところで、このボートには10この荷物が積んであります。これらの荷物を全部積み込んだままだと、荷物が重すぎてボートが沈んでしまいます。ボートが沈まないようにするためには、これらの荷物のうち5こを捨てなければなりません。10このうち、どれを捨てたらよいでしょう。みなさんで話し合い、意見をまとめて、捨てた方がよい荷物を5こ選び、最初に捨てる荷物から順番を付けてください。その理由をワークシートに記入してください。

水20キログラム 米20キログラム 宝石が入った金庫 釣り道具
携帯コンロ 鍋セット 日傘10本 食パン3日分 着替え用の衣服
ボンカレー1年分 (ただし、1部分捨てることはできない。捨てるなら全部捨てること。)

Figure 1 3回の話し合いで用いた課題

方 法

被験者：小学校6年生を対象とした。1つの学級のなかで6名（男子3名、女子3名）からなる班をつくってもらい、そのなかの1つの班を分析対象班とした。

課題：Figure 1に示すような意見集約型課題を用いた。

手続き：4、5日に1度の割合で合計3回の話し合いをおこなってもらった。その話し合いの模様をビデオに記録し、発話の逐語録を作成し、児童の様子とともに分析した。

結果と考察

1. 会話の連鎖に関する結果と考察

1) 全体的展開

ビデオ録画から逐語録を作成し、すべての発話に対し、発話対象、連鎖関係、実用機能、エピソードを付与した。この例をFigure 2に記す。連鎖関係、発話対象、実用機能、エピソードの各定義と会話分析における必要性は以下のとおりである。

① 発話対象

発話対象は個々の成員が誰に向けて発話しているかの記録である。発話対象が特定の個人ではなく、成員全員に向けられている場合は、発話対象は全員とした。

② 連鎖関係

コミュニケーション・モデル構築のために用いた発話分類である。この発話分類は綿巻（1988）が作成した談話分析用の記述概念を土台に、筆者らが本研究のデータに合わせて改作した。発話の連鎖関係カテゴリーの個々の定義をFigure 3に示す。

連鎖関係カテゴリーは、綿巻（1988）に基づき、以下のような手続きで作成、定義した。まず、人のやりとりは開始と応答という2種類の基本的動きから成立する。この動きはその目的によって、提供、請求、受領・了解表明、の3タイプに分類できる（綿巻、1988）。同時に連鎖という視点から発話を分類するポイントは、発話者が先行発話と後続発話とをどの程度考慮しているか、にある。綿巻（1988）はこの視点を遡及性、前望性、という2つの概念で表現している。遡及性は、先行発話へさかのぼる機能を持ち、前望性は後続発話へつなぐ、あるいはうながす機能をもつ。本研究では、前述の2種類の基本的動き、3タイプの分類、および遡及性、前望性という2つの概念を組み合わせ、本研究なりの意味を付与した各連鎖関係カテゴリーを作成した。

そこで以下に各連鎖関係カテゴリーを説明しよう。まず遡及性をもつ発話を応答と呼ぶ。ここで先行発話とのつながりから応答発話を義務応答と任意応答に分類する。この分類は明確な前望性をもつ先行発話が特定の成員に向けられたものか否かで生じる。つまり義務応答は、特定の成員に向けられた先行発話を受けるかたちで、先行発話に向けられた相手の発話である。任意応答は、先行発話が前望性をもつが、特定の成員に向けられたものでない場合、成員の誰かが受けた発話である。

逐語録		連鎖関係	発話対象	実用機能
1	えっとこのうちのまづ何番がいいですか。一番から決めましょう、まづ一番から。	提供	全員	プランニング
2	えっと私は地図がないと思います。理由は地図がないとどこへも行けないし、どこにいるかわからないから。	任意応答	全員	発案/説明
3	えー私は懐中電灯がいると思います。えーだって暗闇のとことかで行動できなくなるから。	任意応答	全員	発案/説明
4	えーと僕は地図があるなら方位磁石がいると思います。	任意応答	全員	説明
5	途中あるいているときにどっちの方向にいるのかわからなくなってきたときに使えらると思います。	任意応答	全員	発案
6	えー僕は腕時計はいいですね。	任意応答	全員	発案/説明
7	えーと僕はナイフがいいと思います。あのナイフはこう。。。あーナイフはこう。。。やっぱいいです。	任意応答	全員	発案/説明/自己の発話の評価
8	まづいらぬものから消して行きたいんですけど。	提供	全員	プランニング
9	ハイハイハイハイ、私テントがいらぬと思うんですけど。	任意応答	全員	拳手/発案
10	テントはまづ必要じゃない、ほら。	任意応答	発話者6	否定
11	あつテントじゃないカッパがいらぬと思うんですけど。	任意応答	全員	言い直し/発案
12	同意、同意。	提供	発話者6	同意
13	はい、じゃあカッパ消しね、カッパ消し。次、他にいらぬもの。	任意応答	全員	方針確認/転換/プランニング
14	救急箱。	任意応答	全員	発案
15	救急箱？救急箱いるよ。だってケガとかしたときどうするんですか？	任意応答・請求	発話者4	否定/説明/情報請求
16	私腕時計いらぬと思うんですけど。	任意応答	全員	発案
17	同意、同意。	任意応答	発話者1	同意

注：/は複数の機能が含まれるときに各機能を区切るために用いている。また、左から出現する時間が早い順に整理している。
 連鎖関係での例：任意応答/総括（連鎖関係でのこの区切りは同一発話内での機能的つながりも表している。）
 実用機能での例：発案/説明

Figure 2 逐語録を3つの分類カテゴリで整理した例

カテゴリー	定義
提供	議論の展開において開始的役割と話題提供的役割を持つもの。
提供・請求	機能としては「提供」であるが、後に続く発話に対して意図的に発話を要求する役割も持つもの。
任意応答	先行発話に対して誰の要求も受けずに自ら任意に発言するもの。
任意応答・請求	機能としては「任意応答」であるが、後に続く発話に対して意図的に発話を要求する役割も持つもの。
任意応答・提供	機能としては「任意応答」であるが、開始的役割と話題提供的役割も持つもの。
義務応答	先行発話の要求から義務的に発言するもの。
総括	一つの話題に対して議論の展開がある程度収束したときに発せられる発言。

Figure 3 連鎖関係カテゴリー

また、前望性をもつ特定発話のなかで、明らかに後続発話を求めている意図性をもつものを請求とした。そして遡及性と請求との両機能をもつ発話を応答・請求としてまとめた。さらに、新しい話題提供、話題開始および情報提供の機能をもつ発話を提供とした。そして遡及性と提供との両機能をもつ発話を応答・提供とした。次に特定の話題が収束した後のまとめ発話を総括とした。

③ 実用機能

連鎖関係は特定発話の前後関係からの分類であった。一方、実用機能発話は、特定発話そのものもつ機能である。この機能は綿巻（1988）の考察を参考にしながら、基本的に筆者らの合議で作成した。実用機能の定義を Figure 4 に示す。

④ エピソード

エピソードは会話のなかの個々の話題をさす。分析にあたっては、逐語録をもとに個々の話題の範囲を同定し、個々のエピソードとして結果に残した。エピソード分析のねらいは、個々のエピソードの性質を把握することにある。特にエピソードの終わり方を分析対象とする。洗練された話し合いとなるために必要な終わり方は、個々のエピソードが成員の同意のもとに収束して終わっているのか、あるいは何らかの結論や合意が次へつながるように発展的に終わっているのか、という面である。分析にあたってはこの2種類の終わり方の出現割合を求めることによって、話し合いの洗練性の指標とする。

会話の全体的展開に関しては、以上の4つの視点から分析した。これらの視点からまとめた3回

分の会話の展開を Figure 5 に示す。

2) コミュニケーション・モデル

① コミュニケーション・モデルの作成

コミュニケーションモデルの構築のために以下のような手続きをとった。まず Figure 5 - 1 - 1 から Figure 5 - 3 - 3 までの発話連鎖の出現頻度に基づいて、先行発話と後続発話との連鎖関係の出現頻度をまとめた。この結果を Figure 6 に示す。

さらに Figure 6 - 1 から Figure 6 - 3 の結果を次のように分析した。まず、各回に出現している発話連鎖を、3 回の話し合いすべてに出現している連鎖、2 回の話し合いに出現している連鎖、1 回しか出現していない連鎖、に分類した。さらに 2 回の話し合いに出現している連鎖は、1, 2 回目の出現, 2, 3 回目の出現に分け、合計 4 種類に分類した。これらの連鎖を連鎖図として Figure 7 に示す。このなかで、上記 4 種類の連鎖を 4 種類の矢印によって示した。1 回目は矢印の数が最も多く、連鎖のありようが煩雑である。これは 1 回目のみ、もしくは 1, 2 回目のみ出現した連鎖が多いことによる。この連鎖は、いわば冗長的連鎖であり、話し合いの展開にとって末節的連鎖であると言える。2 回目になると、1 回目の連鎖に加え新たな連鎖が出現し、この新たな連鎖は 3 回目まで引き継がれていることがわかる。この 2, 3 回目、および 3 回すべてに出現している連鎖とが話し合いの展開にとって中核的な役割を担っていると思われる。ただ、2 回目の連鎖のありようも依然、煩雑に見える。これは、2 回目には、まだ 1, 2 回目出現の連鎖、2, 3 回目出現の連鎖が混在しており、3 回目の洗練された話し合いに至る移行期的な性質があることを示す。このなかから冗長な連鎖が消滅し、必要不可欠な連鎖で構成されたものが 3 回目の連鎖図であると言える。そこでこの 3 回目の発話連鎖を中核連鎖と呼ぶことにする。中核連鎖は 2, 3 回目出現の連鎖、3 回すべてに出現の連鎖からなる。

上記の作成過程にもとづき、連鎖のありようを中核連鎖とそれ以外の末節連鎖に分類した。この内容を Figure 8 に示す。また、3 回目の連鎖図を、1 つの話題なかでの連鎖モデルとして Figure 9 に示す。この Figure 9 のモデルはあくまで 1 つの話題のなかでのモデルである。そこで 1 つの話題から次の話題へのつながり方のパターンをモデルとして作成した。これを話題のつながり方のパターンとして Figure 10 に示す。こうした手続きで作成した Figure 9 と Figure 10 とをコミュニケーション・モデルとした。

② コミュニケーション・モデルの考察

Figure 7 からは以下の点を読みとることができる。すなわち、Figure 7 の矢印は連鎖を表しているが、この矢印の数が回を追うごとに減少していることがわかる。第 1 回目の図は非常に煩雑な連鎖になっているが、第 3 回目ではすっきりした連鎖になっている。このことは、話し合いに必ずしも必要ではない連鎖が消え、展開に必要なやりとりだけで話し合いが進んでいることを示していると思われる。Figure 7 のかたちから回を追うごとに話し合いが洗練されてきていることがわかる。ただ、この洗練過程のなかで残る疑問は、各成員はこのように次第に無駄な発話が省かれてい

カテゴリー	定義	発話例
方略	〔プランニング〕	話し合いの方向づけをするもの。 2-1： いらぬものから決めていきたく思ふんですけど、まずいらぬものから発表してください。
	〔転換〕	話題の区切りが来たと判断して、話題を転換するもの。 2-5： え一次は・・・
	〔方針確認〕	現在話合われている内容が正しいかどうかをメンバーたちに確かめるもの。 1-84： 3番救急箱でいいの？
主張	〔発案〕	各メンバー個人の意見 3-70： 衣服を変えなくても生きていける
	〔説明〕	自分の意見または他のメンバーの意見についての説明。 1-6： その理由は、まず食料確保からやらないといけぬと思うので。
	〔挙手〕	意見を述べる前に行う意思表示。 1-9： はいはいはいはい。
問い尋ね	〔呼び掛け〕	「どうする？」や「何する？」というような発話 3-69： どうする？じゃあ理由は。
	〔念押し〕	自分の思いを相手に再び強調させるもの。 1-38： けがしたらっていうけど食料食べなきて傷は治らぬわけでしょ。 1-39： 食料食べたからって傷が治るって問題じゃぬんだよ。消毒とかしとかなきて変な病気がはいるとかあるじゃない。 1-40： まず、栄養からとらぬといけぬから。 1-41： いやそれは病気のときでしょ。けがのときよ。
	〔問い直し〕	聞き取れなかつた相手の発話をもう一度要求するもの。 1-47： はいはい、おぶればいいんじゃないですか。 1-48： <u>なんて？</u> 1-49： おぶれば。
	〔問い返し〕	相手の発話の一部に疑問の念を抱き、その一部を疑問形で相手に返すもの。 1-66： で、4位が大金持ちになる。 1-67： <u>4位？</u>
	〔情報請求〕	情報が欲しいときに使われるもの。 3-56： どうして鉄くずになるんですか。

Figure 4 - 1 実用機能カテゴリー

カテゴリー	定義	発話例	
問い尋ね	〔同意請求〕	同意を求めるときに使われるもの。おもに、方針確認とともに使われることが多い。	3-45: 着替えていいですか。
	〔判断請求〕	ある事柄について両極端(たとえば正か悪か)の判断を問うときに使われる。	2-16: それはいけないことじゃないんで
受け答え	〔繰り返し〕	先にある発話と同じ発話またはその一部を繰り返すもの。	1-52: ていうかローブが5位じゃないの? 1-53: ローブ, ローブ, ローブ, ローブ。
	〔言い直し〕	先における自分の発話が自分の意志と異なるものであり, それについて訂正すること。	1-11: あっテントじゃない。カップがいら らないと思うんですけど。
	〔情報提供〕	情報請求に対しての受け答え。	2-84: どうして? 2-85: のりかに会えるからで
	〔応答〕	片言な返事のこと。「うん」, 「はい」などの他に先行発話の一部を用いる場合がある。	1-86: 懐中電灯に電池は入っているの? 1-87: <u>入ってるでしょ。</u>
	〔同意〕	同意請求に対しての受け答え。	3-83: 3番救急箱でいいの? 3-84: <u>いいです。</u>
	〔補足〕	先行発話を受けて単純な付け加えをするもの。	1-88: ローブが1センチだったらどうしよう。 1-89: <u>それはひもっていうんだよ。</u>
	〔意味付け〕	先行発話の曖昧さを意味付けて説明するもの。	1-9: 俺はボンカレー1年分ていうのは多分飽きると思うので・・・。 1-10: <u>捨てるものだよ。</u>
	〔否定〕	先行発話への否定意志を言表化したもの。	1-28: だから救急箱は重くて・・・。 1-29: <u>重くないよ。</u>
態度	〔不満〕	先行発話に対して不満の意味を込めた発話をするもの。	3-35: <u>うるさい。</u> そんなこと心配して た

Figure 4 - 2 実用機能カテゴリー

カテゴリー	定義	発話例
対自己 〔検索〕	今自分の考えていることがそのまま言表化したもの。	1-62: ライター, 救急箱。
〔自己発話の評価〕	自分の発話について考え直し, それを中止したり改めたりすること。	1-7: あのナイフはこう……。あーナイフはこう……。やっぱいいです。
〔aha体験 (発見の喜び)〕	先行発話によって自己の知識に影響を及ぼしていることを言表化したもの。	3-39: そうか雨つてのも降るんだ。
〔同調〕	先行発話に続いて無意識的に単語レベルで復唱したりすること。	1-66: ライター, 救急箱, 懐中電灯, 地図。 1-67: 救急箱。 1-68: 救急箱? 1-69: いや, 救急箱。
かき乱し 〔連想的逸脱〕	先行発話に刺激を受けて, 課題解決という目的から逸れていった発話。	2-80: で4位の空を飛べるっていうのは別に瞬間移動があるわけだから空を飛べるっていうのも普通に飛んでいるわけで……。 2-81: 空が飛べるんだったら羽がほしい, 羽がほしいー。
〔完全逸脱〕	連想的逸脱を皮切りに完全に議論の流れから逸れてしまったもの。また, 全く関係のない雑談や歌。	これは話題によってことなるので逐語録を参照。
総括 〔集約〕	これまで話しあわれてきたことに対して, それらをまとめようとする発言。	1-70: 1, 2, 3, 4, 5, 6, あっ6個あるじゃん。
〔終結〕	話しあわれることがもうほとんどない状態に発せられるもの。	3-83: じゃあ全部決まった。 3-84: 終わりました。
〔部分的終結〕	話し合いの途中であるが一区切りの終結を迎えたときに発せられるもの。	1-86: 結構すんなり決まったね。

Figure 4 - 3 実用機能カテゴリー

連鎖関係		発話対象	実用機能
1	提供	全員	プランニング
2	任意応答	全員	発案/説明
3	任意応答	全員	発案/説明
4	任意応答	全員	説明
5	任意応答	全員	発案
6	任意応答	全員	発案/説明
7	任意応答	全員	発案/説明/自己発話の評価
8	提供	全員	プランニング
9	任意応答	全員	挙手/発案
10	任意応答	発話者6	否定
11	任意応答	全員	言い直し/発案
12	任意応答	発話者6	同意
13	提供	全員	方針確認/転換/プランニング
14	任意応答	全員	発案
15	任意応答・請求	発話者4	否定/説明/情報請求
16	義務応答	全員	発案
17	任意応答	発話者1	同意
18	提供	全員	方針確認/プランニング/転換
19	任意応答	全員	発案
20	任意応答	発話者2	否定/説明
21	任意応答	発話者1	説明
22	任意応答	全員	発案/説明
23	任意応答	全員	発案
24	任意応答・請求	全員	発案/同意請求
25	義務応答	発話者1	同意/説明
26	任意応答・提供	全員	補足/方針確認/プランニング/発案
27	任意応答	全員	発案
28	任意応答	全員	説明
29	任意応答	発話者1	否定
30	任意応答	全員	発案
31	任意応答	発話者1	否定/説明
32	任意応答	発話者6	連想的逸脱
33	任意応答	全員	補足/発案
34	提供	全員	プランニング/発案/プランニング
35	提供	全員	プランニング/発案
36	任意応答	全員	否定
37	任意応答	発話者1	説明
38	任意応答	発話者6	説明
39	任意応答	発話者1	否定/説明
40	任意応答	発話者6	説明

Figure 5-1-1 第1回の発話分類カテゴリー一覧

連鎖関係	発話対象	実用機能
41 任意応答	発話者1	補足／念押し／説明
42 任意応答	発話者6	説明
43 任意応答	発話者1	意味付け／説明
44 任意応答	発話者6	説明
45 任意応答	発話者1	否定
46 任意応答	発話者1	説明
47 任意応答	発話者1	挙手／連想的逸脱
48 任意応答・請求	発話者2	問い直し
49 義務応答	発話者1	言い直し
50 任意応答	発話者2	補足／発案
51 提供	全員	転換／プライニング
52 任意応答	全員	発案
53 任意応答	全員	繰り返し
54 任意応答・請求	発話者6	情報請求
55 義務応答	発話者5	情報提供
56 義務応答	発話者5	情報提供
57 任意応答	全員	補足／発案
58 任意応答	全員	連想的逸脱
59 任意応答	全員	連想的逸脱
60 提供	全員	発案／説明
61 任意応答	全員	補足
62 提供	自己	検索
63 任意応答	発話者5	同調
64 任意応答	自己	検索
65 任意応答	全員	検索
66 任意応答	自己	検索
67 任意応答	発話者5	同調
68 任意応答・請求	発話者1	検索
69 義務応答	発話者6	同調
70 総括	全員	集約
71 提供	全員	発案
72 任意応答	全員	繰り返し
73 任意応答	全員	説明
74 任意応答・請求	全員	方針確認／同意請求
75 提供	全員	プランニング
76 任意応答	全員	発案
77 任意応答	発話者5	否定
78 任意応答	全員	発案
79 提供・請求	全員	プランニング／同意請求
80 義務応答	全員	同意／発案

Figure 5 - 1 - 2 第1回の発話分類カテゴリー一覧

	連鎖関係	発話対象	実用機能
81	任意応答	全員	補足
82	任意応答	全員	連想的逸脱
83	提供	全員	プランニング
84	任意応答・請求	全員	方針確認/同意請求
85	義務応答	発話者5	同意
86	総括	全員	部分的終結
87	提供	全員	連想的逸脱
88	任意応答	発話者3	応答
89	提供	全員	連想的逸脱
90	任意応答	発話者3	補足
91	提供・請求	全員	情報請求
92	義務応答	全員	情報提供
93	義務応答	全員	情報提供
94	任意応答・請求	全員	同意請求
95	義務応答	発話者6	同意
96	任意応答	全員	補足
97	義務応答	全員	情報提供
98	義務応答	全員	情報提供

エピソード13 (rows 81-86)

エピソード14 (rows 87-88)

エピソード15 (rows 89-90)

エピソード16 (rows 91-98)

Figure 5 - 1 - 3 第1回の発話分類カテゴリー一覧

連鎖関係		発話対象	実用機能
1	提供	全員	プランニング
2	任意応答	全員	挙手/発案/説明
3	任意応答・請求	全員	方針確認/同意請求
4	義務応答	発話者1	同意
5	提供・請求	全員	転換/発案/説明/方針確認/同意請求
6	義務応答	発話者1	同意
7	提供	全員	発案/説明
8	提供・請求	全員	発案/説明/同意請求
9	義務応答	発話者1	同意
10	提供	全員	発案/説明
11	任意応答	発話者1	否定/説明
12	任意応答	全員	説明/発案
13	任意応答	全員	説明/否定
14	提供	全員	発案/説明
15	任意応答	発話者6	否定/説明
16	任意応答・請求	発話者1	判断請求
17	義務応答	発話者6	説明
18	任意応答	発話者1	否定/説明
19	任意応答	発話者1	補足
20	任意応答	発話者6	補足
21	任意応答	発話者2	否定
22	任意応答・請求	全員	挙手/情報請求
23	義務応答	発話者5	情報提供
24	提供	全員	発案
25	任意応答	発話者1	否定
26	提供	全員	発案
27	提供	全員	発案
28	任意応答	発話者1	否定/連想的逸脱
29	提供	発話者6	完全逸脱
30	任意応答	発話者1	完全逸脱
31	任意応答	発話者1	完全逸脱
32	任意応答	発話者1	完全逸脱
33	任意応答	発話者1	完全逸脱
34	提供	全員	発案
35	提供	全員	発案
36	任意応答	全員	挙手/同意/補足
37	任意応答	全員	説明
38	任意応答	全員	補足
39	任意応答	全員	補足
40	任意応答	全員	同意

Figure 5 - 2 - 1 第2回の発話分類カテゴリー一覧

連鎖関係	発話対象	実用機能
41 任意応答・請求	全員	方針確認/同意請求
42 義務応答	発話者1	同意
43 提供	全員	プランニング
44 任意応答	発話者6	発案
45 任意応答	発話者1	否定
46 任意応答	発話者1	完全逸脱
47 任意応答	発話者5	補足
48 任意応答	発話者1	同意
49 任意応答	発話者1	補足
50 任意応答	全員	同意/補足
51 任意応答/総括/提供・請求	全員	否定/集約
52 義務応答	発話者1	同意
53 総括	全員	終結
54 提供	全員	プランニング
55 任意応答・請求	全員	プランニング
56 任意応答	全員	プランニング
57 任意応答	全員	挙手
58 任意応答	全員	挙手
59 任意応答	全員	検索
60 提供	全員	プランニング
61 任意応答	全員	検索
62 任意応答	全員	発案
63 任意応答	全員	同意
64 任意応答・請求	全員	方針確認/同意請求
65 義務応答	発話者5	同意
66 提供	全員	転換/発案
67 任意応答・請求	発話者5	問い返し
68 任意応答	発話者5	否定/発案
69 任意応答・請求	発話者1	情報請求
70 義務応答	発話者6	連想的逸脱
71 義務応答	発話者6	連想的逸脱
72 任意応答	発話者1	連想的逸脱
73 任意応答	発話者6	連想的逸脱
74 任意応答	発話者1	連想的逸脱
75 任意応答/総括	発話者5	連想的逸脱/同意/部分的終結
76 提供・請求	全員	方針確認/同意請求
77 義務応答	発話者5	同意
78 提供	全員	転換/発案
79 任意応答	全員	補足
80 提供	全員	発案

Figure 5 - 2 - 2 第2回の発話分類カテゴリー一覧

連鎖関係	発話対象	実用機能
81 提供	全員	連想的逸脱
82 任意応答	発話者1	完全逸脱
83 提供	全員	発案
84 任意応答・請求	発話者1	情報請求
85 任意応答	発話者1	情報提供
86 任意応答	発話者5	同意/発案
87 任意応答	全員	否定/説明
88 任意応答	発話者6	連想的逸脱
89 提供	発話者6	連想的逸脱
90 任意応答	発話者2	完全逸脱
91 任意応答	発話者6	完全逸脱
92 総括	全員	集約
93 総括/提供・請求	全員	集約/終結/同意請求
94 義務応答	発話者1	同意

注：発話番号51と93のエピソード分けについては、同一発話内であるが、内容が先行発話を受け継ぐもの（総括）と後続発話に続くもの（提供）とに分かれているのでこのような区切り分けを行った。また、これらは同一発話内のものどうしであるが、連鎖関係として分析するときは、総括/提供を「総括-提供」、総括/提供・請求を「総括-提供・請求」とした。

Figure 5 - 2 - 3 第2回の発話分類カテゴリー一覧

連鎖関係		発話対象	実用機能
1	提供	全員	プランニング
2	任意応答	エピソード1 発話者1	プランニング
3	任意応答	全員	プランニング
4	提供	全員	発案
5	任意応答	エピソード2 発話者6	同意
6	提供	全員	発案
7	任意応答・請求	エピソード3 全員	方針確認/同意請求
8	義務応答	発話者6	同意
9	提供	全員	発案
10	任意応答	エピソード4 全員	意味付け
11	任意応答	全員	プランニング
12	任意応答	全員	プランニング
13	提供	エピソード5 全員	転換
14	任意応答	全員	挙手
15	提供	エピソード6 全員	発案/プランニング
16	任意応答	全員	同意/プランニング/発案
17	任意応答・請求	全員	応答/発案/プランニング/呼び掛け
18	義務応答	全員	発案
19	任意応答	発話者2	否定
20	任意応答・請求	発話者5・6	情報請求
21	義務応答	発話者2	情報提供
22	提供	エピソード7 全員	発案/説明
23	任意応答	全員	発案
24	総括	全員	終結
25	提供	エピソード8 全員	転換/プランニング/発案
26	任意応答	全員	プランニング
27	任意応答	全員	発案
28	任意応答	全員	補足
29	提供	エピソード9 全員	発案
30	任意応答	全員	同意/補足
31	任意応答	全員	補足
32	任意応答	全員	補足
33	提供	エピソード10 全員	発案/説明
34	任意応答	発話者5	否定/連想的逸脱
35	任意応答	発話者2	不満/連想的逸脱
36	任意応答	発話者2	同意
37	任意応答	発話者2	補足
38	任意応答	発話者2	同意
39	任意応答	自己	aha 体験
40	提供	エピソード11 全員	転換/プランニング

Figure 5 - 3 - 1 第3回の発話分類カテゴリー一覧

	連鎖関係	発話対象	実用機能
41	任意応答	全員	検索
42	任意応答	全員	発案
43	任意応答	全員	同意
44	任意応答	全員	同意
45	任意応答・請求	全員	方針確認/同意請求
46	義務応答	発話者5	同意
47	提供	全員	プランニング/発案/挙手/発案
48	任意応答・請求	全員	発案/方針転換
49	任意応答・請求	発話者6	情報請求/発案
50	任意応答	発話者6	発案
51	任意応答・請求	発話者1・5	情報請求
52	義務応答	発話者2	情報提供
53	義務応答	発話者1	連想的逸脱
54	義務応答	発話者2	情報提供
55	義務応答	発話者2	情報提供
56	提供	全員	転換/プランニング
57	任意応答	全員	挙手/発案
58	任意応答	全員	挙手/発案
59	任意応答	全員	連想的逸脱
60	任意応答	全員	挙手/繰り返し/発案
61	任意応答	全員	同意
62	任意応答	全員	挙手/発案
63	任意応答	発話者1	情報請求
64	任意応答	発話者1	補足
65	任意応答/総括	全員	同意/部分的終結
66	提供・請求	全員	プランニング/発案/転換/情報請求
67	義務応答	全員	発案/呼び掛け
68	任意応答	自己	検索
69	任意応答	全員	発案
70	任意応答	全員	発案
71	提供	全員	転換/プランニング/発案
72	任意応答	全員	同意/補足
73	任意応答・請求	全員	方針確認/同意請求
74	義務応答	発話者5	同意
75	提供	全員	発案
76	任意応答	発話者1	連想的逸脱
77	任意応答	発話者3	連想的逸脱
78	任意応答	全員	連想的逸脱
79	任意応答	全員	発案
80	任意応答	全員	連想的逸脱

Figure 5 - 3 - 2 第3回の発話分類カテゴリー一覧

	連鎖関係		発話対象	実用機能
81	任意応答	エピソード16 ↓	自己	連想的逸脱
82	任意応答		自己	連想的逸脱
83	総括		全員	終結
84	総括		全員	終結

Figure 5-3-3 第3回の発話分類カテゴリー一覧

後続発話 先行発話	提供	提供 ・請求	任意応答	任意応答 ・請求	任意応答 ・提供	義務応答	総括	合計
提供	1		12	1				14
提供 ・請求						2		2
任意応答	9	2	40	6		1		58
任意応答 ・請求	1					7		8
任意応答 ・提供			1					1
義務応答			5	1	1	3	2	12
総括	2							2

全発話連鎖数→ 97

Figure 6 - 1 第1回の連鎖関係出現頻度（数字は出現頻度数）

後続発話 先行発話	提供	提供 ・請求	任意応答	任意応答 ・請求	任意応答 ・提供	義務応答	総括	合計
提供	3	1	11	4				19
提供 ・請求						5		5
任意応答	7		29	5			3	44
任意応答 ・請求			3			6		9
任意応答 ・提供								0
義務応答	6	1	2			1	1	11
総括	1	3					1	5

全発話連鎖数→ 93

Figure 6 - 2 第2回の連鎖関係出現頻度 (数字は出現頻度数)

後続発話 先行発話	提供	提供 ・請求	任意応答	任意応答 ・請求	任意応答 ・提供	義務応答	総括	合計
提供			13	2				15
提供 ・請求						1		1
任意応答	8		30	5			3	46
任意応答 ・請求			1	1		6		8
任意応答 ・提供								0
義務応答	5		2			3		10
総括	1	1					1	3

全発話連鎖数 → 83

Figure 6 - 3 第3回の連鎖関係出現頻度（数字は出現頻度数）

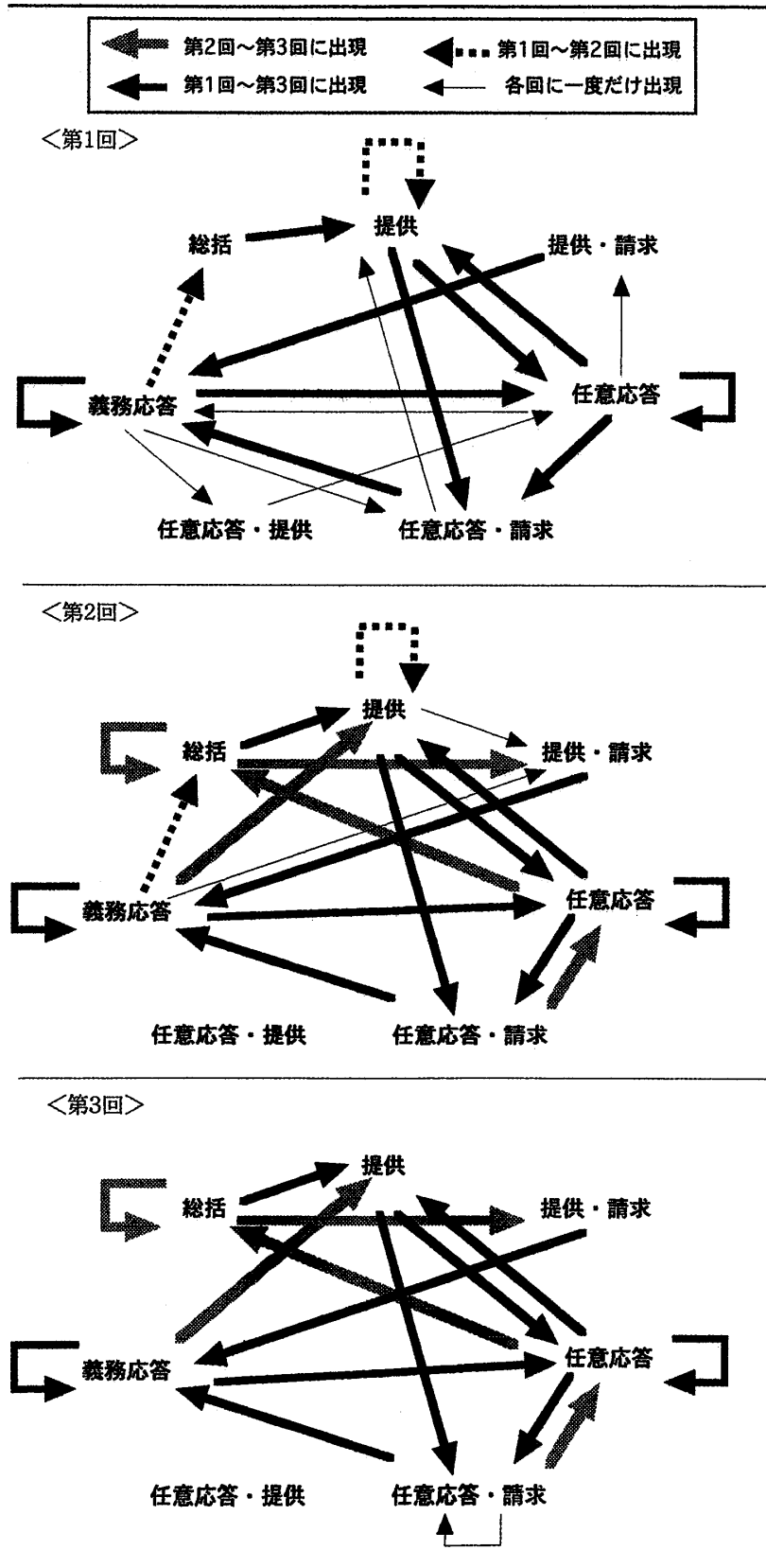


Figure 7 3回の話し合いの発話連鎖図

<p>中核的な連鎖</p>	<ul style="list-style-type: none"> ①提供－任意応答 ②提供－任意応答・請求 ③提供・請求－義務応答 ④任意応答－任意応答 ⑤任意応答－任意応答・請求 ⑥任意応答－総括 ⑦任意応答－提供 ⑧任意応答・請求－任意応答 ⑨任意応答・請求－義務応答 ⑩義務応答－義務応答 ⑪義務応答－任意応答 ⑫義務応答－提供 ⑬総括－総括 ⑭総括－提供 ⑮総括－提供・請求
<p>末節的な連鎖</p>	<ul style="list-style-type: none"> ①提供－提供 ②提供－提供・請求 ③任意応答・請求－任意応答・請求 ④任意応答－提供・請求 ⑤義務応答－総括 ⑥義務応答－任意応答・提供 ⑦任意応答・請求－提供 ⑧義務応答－提供・請求 ⑨任意応答・提供－任意応答

Figure 8 中核連鎖と末節連鎖との分類

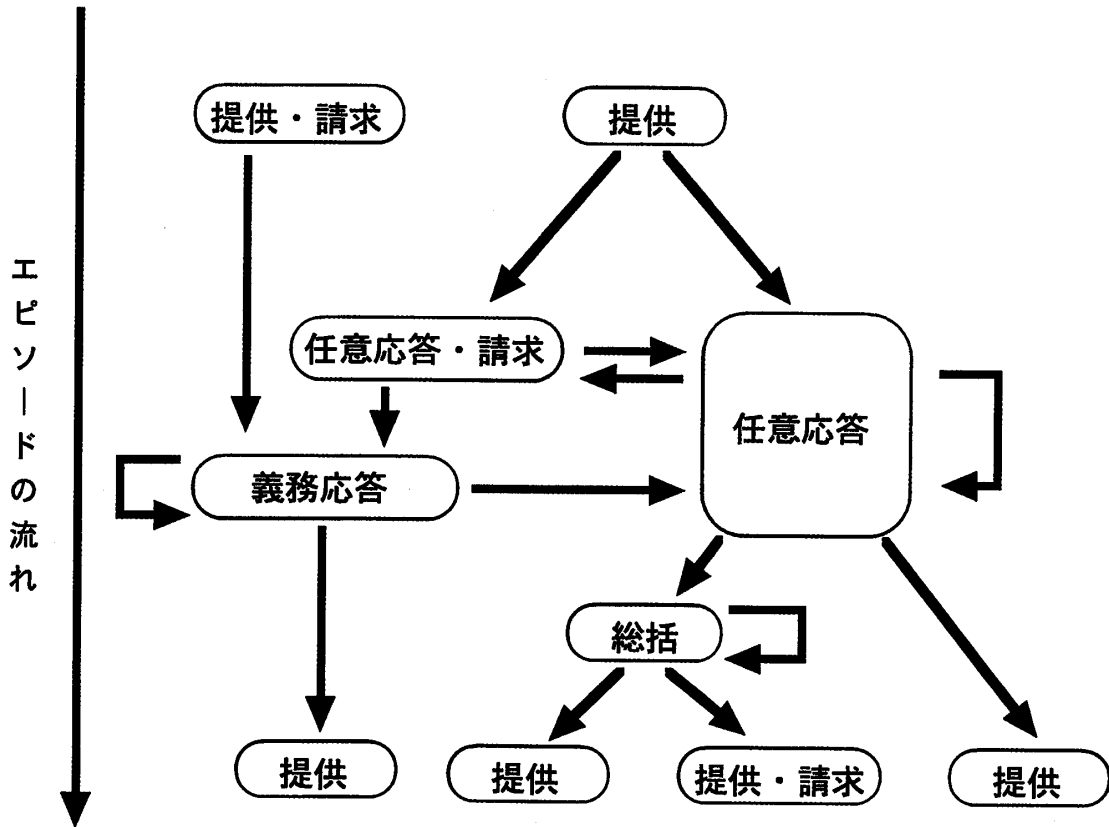
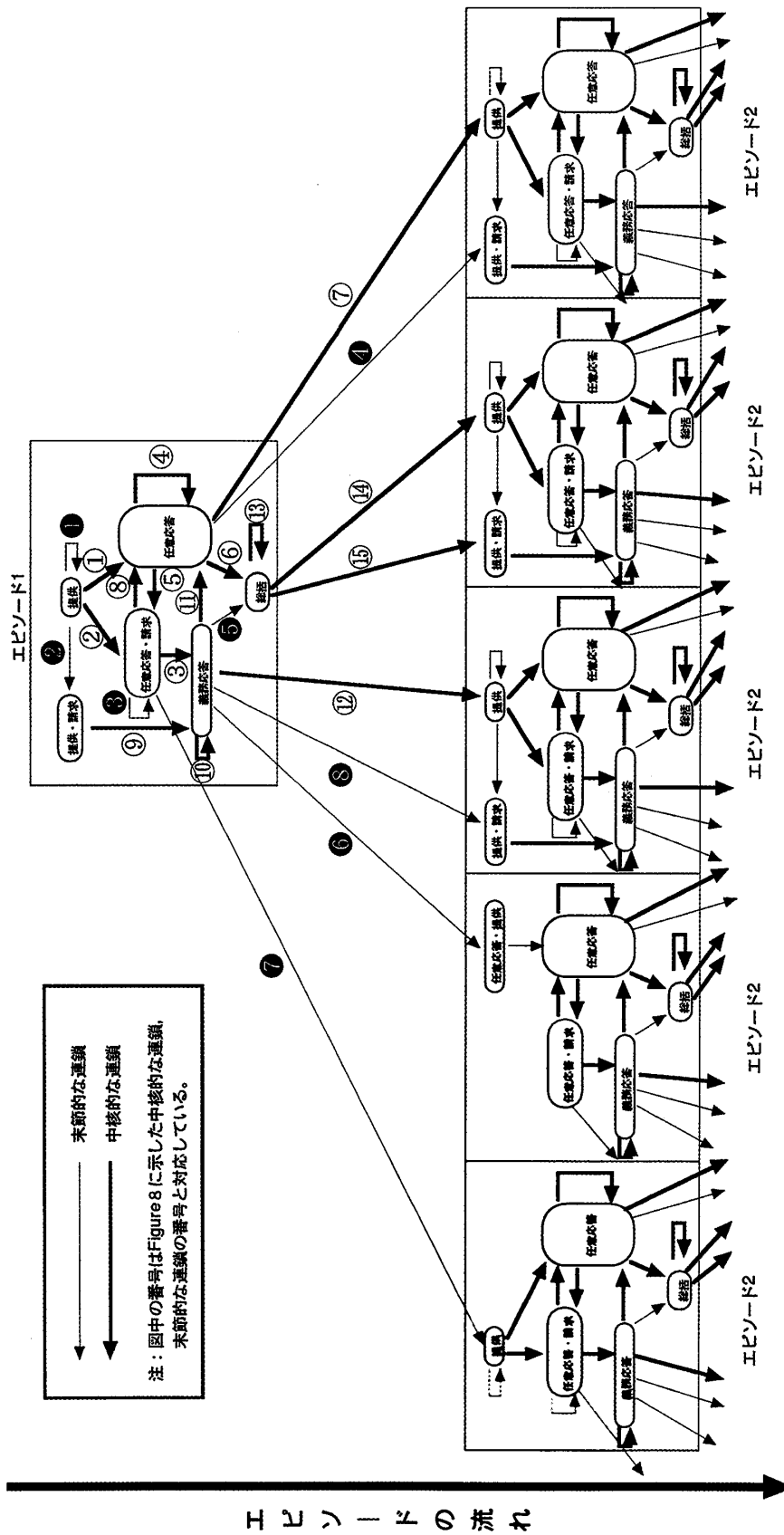


Figure 9 1つの話題のなかの中核連鎖の発話モデル



注：エピソード1⇒エピソード2の関係が以下も繰り返される。

Figure10 中核連鎖による話題のつながり方のパターン

ることを自覚しているのだろうか、という点である。つまり、自覚的、意識的に無駄な発話を控えているのだろうか。あるいは話の展開から自然とそういう技術が身につくのであろうか。この点は話し合い体験に基づく学習効果を考える際に重要になるため、今後取り上げるべきテーマになると思われる。

Figure 9 のモデルからは、以下の諸点が話し合いの展開として把握できる。まず話し合いの開始は、提供、および提供・請求という提供発話によってなされる。さらに請求発話の場合は、その請求に応じるかたちの義務応答発話で受ける。提供だけの場合は成員の誰かが受けるかたちの任意応答発話で受ける。そして義務応答、任意応答から提供に至る。ただし任意応答発話の場合、総括を経て提供に至る場合もある。コミュニケーションは基本的に、提供→義務応答・任意応答→提供というサイクルで展開していくことが明らかになった。また、同じ連鎖機能をもつ発話の継続は、義務応答、任意応答、総括の部分で生じている。Figure 5 の結果から、義務応答の継続は、特定の請求発話に対して複数の成員が応答していることによる。任意応答の継続は、個々の成員が自由に発話と受けを展開していることを示す。総括の継続は複数の視点からのまとめであると考えられる。

また、連鎖のありようを中核連鎖と末節連鎖とに分類した Figure 8 からは以下のことが読みとれる。提供を提供で受けている連鎖のかたちは末節連鎖になっている。これは最初の提供発話を受ける応答発話が出現しないまま、次もまた提供発話が現れていることを示す。このことから、特定の提供発話のあとに受けとしてのしっかりした応答発話がない展開は、話し合いのなかで柱となる展開とはならず、末節的連鎖になってしまう、ことが指摘できる。

また、任意応答・請求-任意応答・請求という連鎖も請求発話が続いている。これは請求発話に対して、それを受けとめる発話が出現せず、先行発話が無視されるかたちで次の請求発話が発現した連鎖であると言える。こうした連鎖もまた末節的連鎖になることが明らかになった。

これら提供-提供、および任意応答・請求-任意応答・請求という末節連鎖に共通する特徴は、先行発話が無視、あるいは受け流してしまう点にある。これは先行発話がある場で立ち消え、次につながらない連鎖であることを意味する。

これらの特徴からわかることは、特定発話をその場で受け流さず、しっかりと受けとめ、収束させ、結論を次へ渡すことが話し合いの円滑な展開には必要であるということであろう。ここで受けとめるという現象については考察の必要があると思われる。受け流すということは、他者の発話、あるいは発話者に対する無関心さを表している。一方、しっかりと受けとめるということは他者の発話、あるいは発話者への関心を表している。話し合いが熱気に溢れ、円滑に進む条件には、この他者発話、および発話者への関心が含まれている、と言える。話し合い体験の意義としての、他者への関心、というテーマは今後哲学的知見も含めたうえで、深めていく必要がある。

さらに上記の結果から、特定発話をその場で受け流さず、しっかりと受けとめ、収束させることの重要性が示唆された。このことは個々の連鎖に限らず話し合い全体の展開を考えるうえで重要な

ことである。個々の発話をしっかりと受けとめるという作業を続けることで、特定の話題が収束し、明確な結論と共通理解が導出される。そしてこの作業の継続が、合意を形成しながらの結論の渡しと蓄積につながる。一方、個々の発話が聞き流され、受け流されると、当該の話題は雲散霧消し、意見の渡しと蓄積がなされなくなる。

また、本研究で意見集約型課題を用いた理由は、先述のように、この課題がまさしく意見の蓄積型課題であるからにはほかならない。そこで上述の見解を踏まえ、次に各エピソード（話題）がどのような終わり方をしているか、についての分析を行う。各エピソードの終わり方をみることで、個々の話題が収束しているか否かを明らかにすることができる。そして収束していれば、それは一定の合意が形成されたということの意味する。その結果、話し合いのなかで意見の蓄積がなされていると判断できるのではなかろうか。

3) エピソードの終了型の分析

ここでは各エピソードの終わり方を分析する。仮説的に考えると、エピソードの終わり方は大きく2種類に分けることができるであろう。ひとつは、成員の同意が得られて終了する収束型である。もうひとつは、収束はしないものの、終了時点で次の展開につながるような発案やプランが出される発展型である。発展型は、収束はしていないものの、成員の合意のもと、次へつなげる渡し機能をもつ、という意味で蓄積と捉えることができる。問題は、特定の話題が次へのつながり、関連性をもつか否か、ということである。したがって、エピソードの終わり方が、次へのつながりをもたず、その場限りで雲散霧消する場合は、展開の仕方としての洗練性が低い、ということになる。こうした理由から以下の分析では、収束型、発展型がどのような頻度で行われているかをみていくこととする。

① エピソードの終了分析の結果

この分析には Figure 5 を用いた。Figure 5 に示してある各エピソードの開始時と終了時との発話の実用機能を取り上げる。そして各エピソードの終了時発話の実用機能によって各エピソードを収束型と発展型とに分類する。実用機能のなかで収束型エピソードとなるのは、終了時発話の実用機能が、同意（請求）、集約、方針確認、部分的終結、となっているものである。これらは基本的に成員の共通理解を求める発話である。共通理解を求めるということは、次の展開へ進むための蓄積すべき結論が得られたことを示す。発展型エピソードとなるのは、終了時の実用機能が発案、プランニング、情報提供、となっているものである。エピソードの終了時に新たな提案がなされていることを示し、次のエピソードへの橋渡しをしていると言える。Figure 11 にこの結果を示す。Figure 11 では、この2種類の生起割合を示し、これ以外の終わり方については明示しなかった。

② エピソードの終了分析の考察

Figure 11 にみられる傾向としては、まず回を追うごとに収束型エピソードの割合が増加していることである。すなわち、特定のエピソードが終了する際に共通理解、合意を得るための作業を行う割合が増加しているのである。

開始時実用機能	終了時実用機能	エピソード番号
【第1回】		
<u>収束型エピソード</u>		
プランニング (方針確認・転換)	→ 同意	2, 3, 4
発案	→ 同意	10
プランニング	→ 部分的終結	13
検索	→ 集約	9
<u>発展型エピソード</u>		
プランニング	→ 発案 (説明)	1, 11
方針確認・プランニング・発案	→ 補足・発案	5, 6
<u>各エピソードの割合</u>		
収束型エピソード: 37% (6/16) 発展型エピソード: 25% (4/16)		
<hr/>		
【2回目】		
<u>収束型エピソード</u>		
プランニング	→ 同意・(補足)	1, 10, 13
転・発・説・方・同意請求	→ 同意	2
発案・(説明)	→ 同意	3, 9
方針確認・同意請求	→ 同意	15
集約・終結・同意請求	→ 同意	20
<u>発展型エピソード</u>		
発案・説明	→ 情報提供	5
プランニング	→ 検索	12
<u>各エピソードの割合</u>		
収束型エピソード: 40% (8/20) 発展型エピソード: 10% (2/20)		
<hr/>		
【3回目】		
<u>収束型エピソード</u>		
発案	→ 同意 (補足)	2, 3, 9
発案 (説明)	→ 終結	7, 16
転換・プランニング・(発案)	→ 同意	11, 13, 15
発案・説明	→ 同意	10
<u>発展型エピソード</u>		
発案・プランニング	→ 発案・(補足)	8, 14
発案	→ プランニング	4
プランニング	→ プランニング	1
発案・プランニング	→ 情報提供	6
<u>各エピソードの割合</u>		
収束型エピソード: 56% (9/16) 発展型エピソード: 37% (6/16)		

Figure11 収束型エピソードと発展型エピソードの結果

また、1回目、2回目までは、収束型と発展型とを合わせた割合が全体の5割から6割を占めている。この数字が3回目になると93%となり、ほぼ全体のエピソードの終わり方が収束型か発展型のどちらかである、ということになる。これは非常に洗練性の高い話し合いの展開であると言えることができる。

これはおそらく意見集約型課題の学習効果ということが考えられる。話し合いの学習効果については、仮屋園ら（2004, 2002）で、情報統合型課題によって一般協同問題解決方略が学習される、という見解が得られている。そしてこの学習効果の要因として、情報統合型という課題構造が特定タイプの話し合いの方略を誘発した、という考察を行った。本課題においても、意見集約型という課題構造の特徴上、どうしても意見を蓄積する方略を用いなければ回答がつかれないという事態が必然的に生まれる。この体験によって、3回目の話し合いにおいては、意見の蓄積と次への橋渡しという方略が成員の間に身につけていったと考えられる。

この現象は、環境としての課題構造と方略との相互作用の問題である。本研究、および仮屋園ら（2004, 2002）の現象は、どのような理論的枠組みで理解すればよいただろうか。そのためのひとつの試みとして、ここではアフォーダンス（佐々木, 1994）の枠組みから考えてみたい。一般に、アフォーダンスとは環境が生体に提供する新しい意味や価値である。環境のなかに内在し、生体に与えるために環境のなかに備わっている情報である。しかし、この環境のなかに内在し、環境が我々に与えてくれる情報の見え方は個々の生体によって異なる。このことを中山（2004）は沢登りの例で考えている。沢登りの熟達者は、手や足をかけてよい箇所を岩場のなかから適切に読みとることができる。これは岩場が、登山者が登るための手がかり（情報）をアフォード（与えて）してくれるのである。そして、環境がアフォードしてくれる情報は登山者の特定の行動を誘発していく。しかし、熟達者に比べて沢登りの初心者には、岩場が提供してくれる情報のあり方は違って見えるであろう。アフォーダンスは主体と環境との関係のあり方を問題としていると言える。

話し合い場面にこの考えを適用すると以下のように考察できよう。すなわち、課題構造は環境としてのアフォーダンスをもつと言える。そして、成員はその課題に取り組むことで、課題構造に含まれるアフォーダンスを読みとる。その読みとられた情報にしたがって話し合いに関する特定の方略が誘発される。これは無自覚的な過程かもしれない。しかし仮屋園ら（2004, 2002）では、この体験で得られた方略の転移はかなり安定性が高いという結果が得られている。

話し合い技術の学習という視座からみると、これらの結論から以下の見解が得られるであろう。すなわち、話し合いの方略や技術を高めようとする場合、身につけさせたい方略を明確に特定し、そうした方略をアフォードしてくれる構造をもった課題をテーマとして選択する、という方法が有効である。成員は当該の課題構造にふさわしい方略を展開し、学習する。このことを踏まえると、話し合い技術の習得にあたって重要なのは、どのような構造をもった課題やテーマで話し合いを行うか、という点である。そしてその構造によって身につく技術が変わってくるのである。

4) 末節連鎖の出現率

① 末節連鎖出現率の結果

各話し合いの各エピソードのなかでの末節連鎖の出現頻度を分析した。この結果を Figure 12に示す。この分析のねらいを以下に記す。Figure 7において、回を追うごとに話し合いが洗練されていることがみてとれた。これを数字として具体的に把握することがねらいである。手続きとして、Figure 5をもとにして、各エピソードのなかでの末節連鎖の出現率を算出した。例えば Figure 12-1のエピソード5における14.2%という数字の算出方法は次のとおりである。これは Figure 5-1-1のエピソード5の分析に相当する。このエピソード内での末節連鎖は任意応答・提供-任意応答の1箇所である。そこでこのエピソードの全連鎖数7との割合を $1/7$ として算出した。

Figure 12において末節率0%のエピソードはすべて中核連鎖によって話がつながっていることを示す。この結果から、末節連鎖を含むエピソードは、第1、2回目で3個、第3回目で1個、というように次第に減少していることがわかる。

② 末節連鎖出現率の考察

この結果を受けて、末節連鎖が出現した理由を逐語録をもとにして微視的に解釈した。学習面での指導においては、いわゆるこうした誤りの原因分析が必要とされる。話し合い場面でも、こうした末節連鎖の発生要因を分析することで、話し合いの技術面での指導が可能になる。

末節連鎖の発生要因は以下のように分類できた。すなわち、1) 共通理解不足による発生：同意請求発話をした後も、理解不足の成員がいるため、その後、補足的な発話が続いた。2) 先行発話の受けとめ不足による発生：これは以下のように分類された。すなわち、①プランニングと発案発話が連続して続くことによる発生である。これは Figure 8で考察した提供-提供のパターンである。いろんな方針を出し合っている状態であるが、先述のように先行発話（プランニングと発案）をしっかりと受けとめ、ひとつひとつを吟味するということがなされていなかった。②同意発話の後にそれを受けとめる発話がないことによる発生である。具体的には同意請求発話の後にプランニング発話が続いていた。つまり、同意請求に対してそれを受けとめる発話がきていなかった。3) 同じ種類の発話の連続による発生：同意発話で特定の話題が完結しているにもかかわらず終結発話を続けており、これが冗長連鎖と判断された。

以上の分類から以下のことがらが指摘できる。まず共通理解が円滑に成立しない場合は、そのための補足的、繰り返しの作業が必要となり、これが末節的な連鎖となる。個々の成員が意識して話の展開に参加する必要が求められよう。次の発生要因は、プランニングと発案の発話が連続する現象である。これは先述のように、先行発話をしっかりと受けとめないことに起因する。すなわち、先行発話を受けとめることなく、無視し、自己の提案のみを繰り返すことで生じる事態であった。

本研究で見出された主要見解のひとつは、この受けとめ機能の重要性であろう。この受けとめ機能に関し、方略面からは次の指摘が可能であろう。すなわち、話し合いは、ともすれば自己の意見の表出のみが注目されがちである。しかし本研究からは、先行発話を受けとめず、受け流す発話が

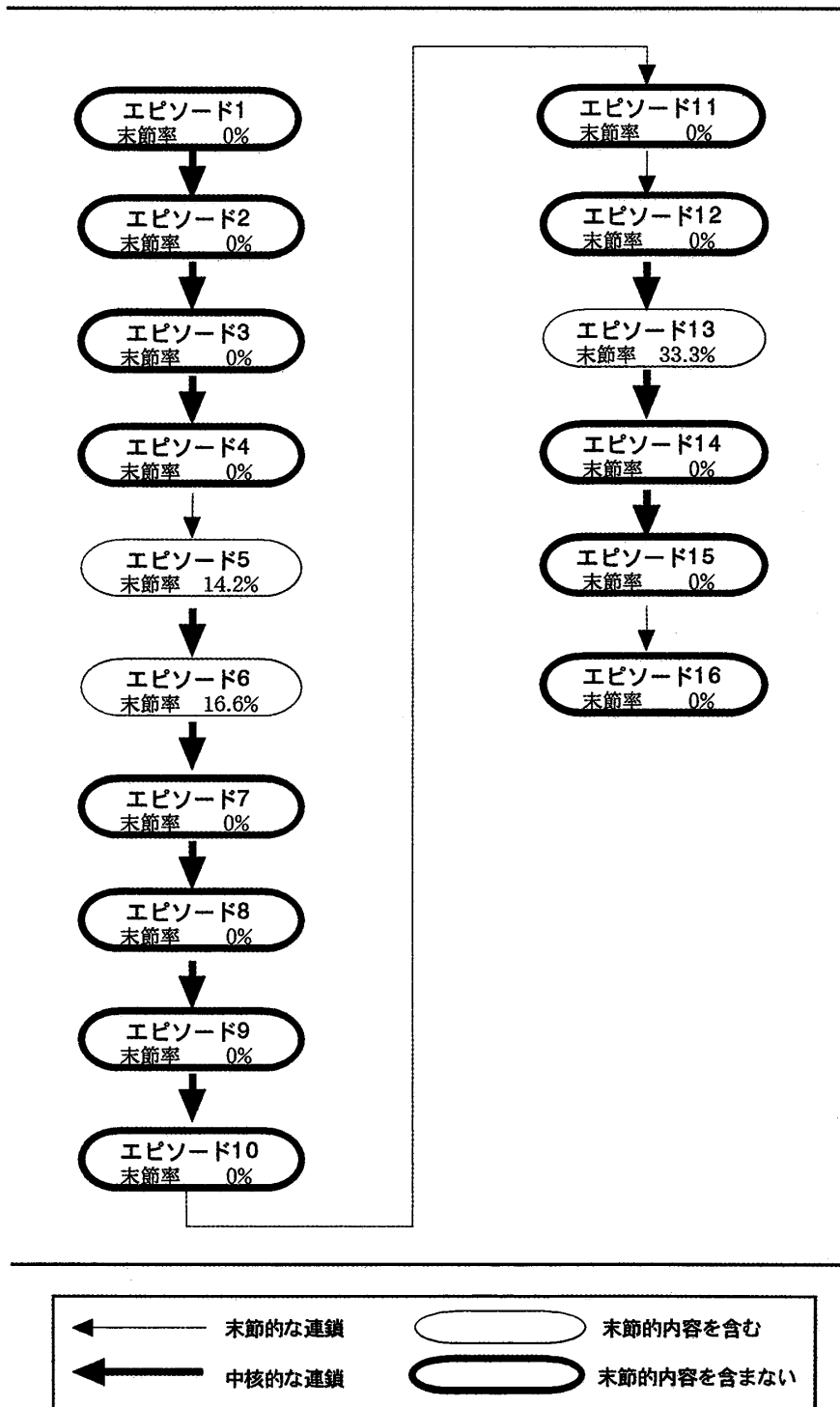


Figure12 - 1 第1回における各エピソード内の末節率とエピソード間の末節連鎖

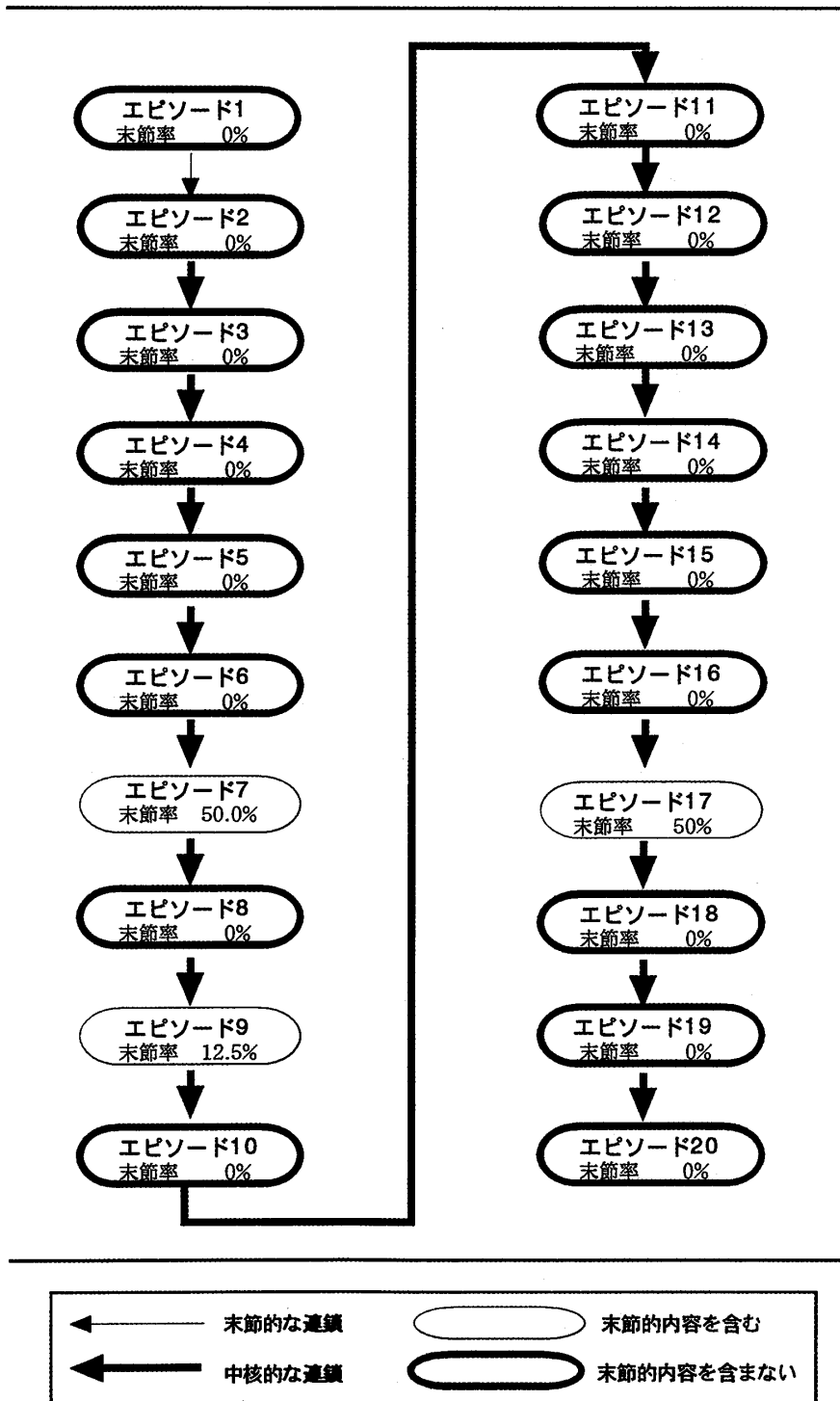


Figure12 - 2 第2回における各エピソード内の末節率とエピソード間の末節連鎖

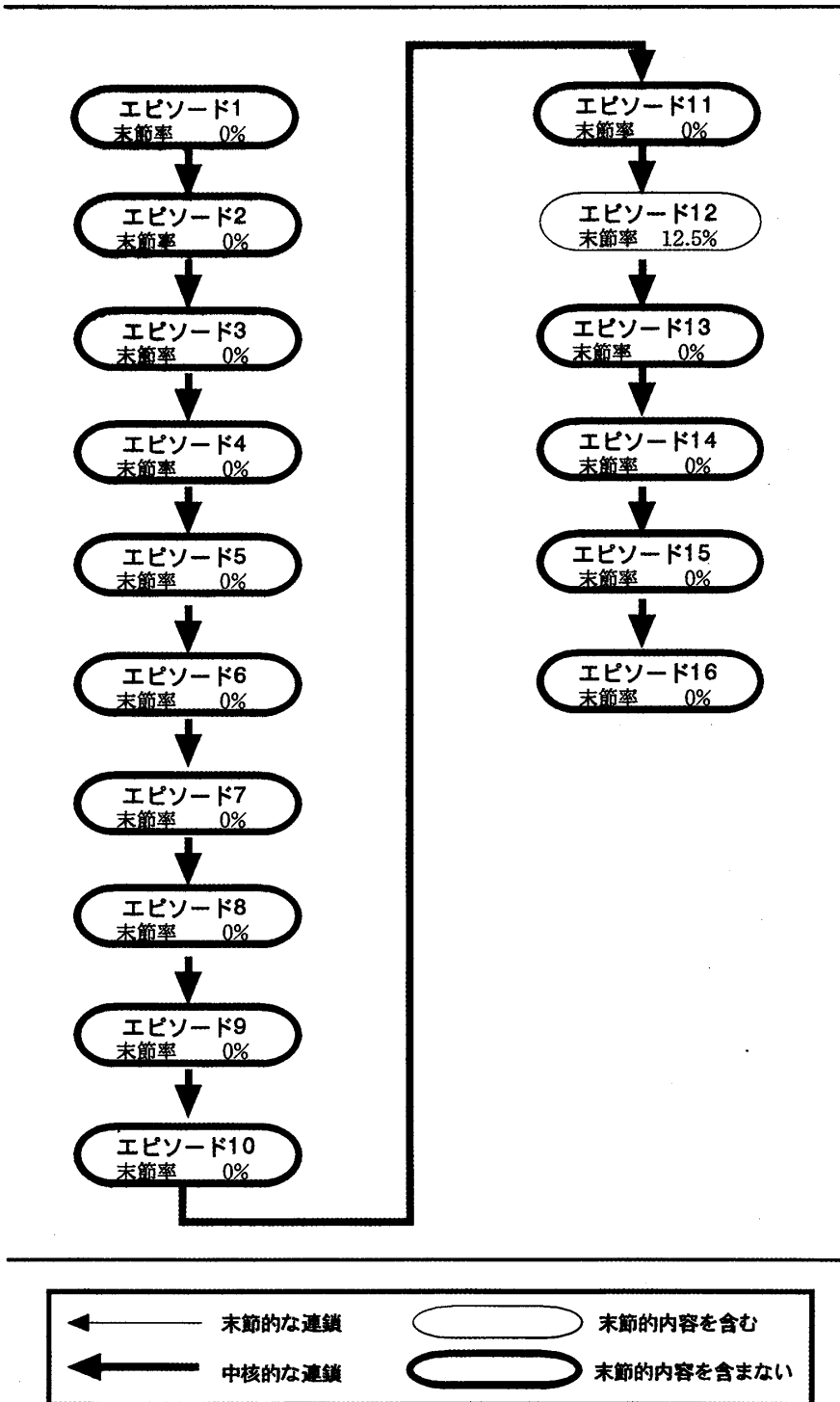


Figure12 - 3 第3回における各エピソード内の末節率とエピソード間の末節連鎖

末節連鎖になっていることが明らかになった。話し合いが円滑に進むために必要な方略は、蓄積的に次へつないでいく方法である。受けとめ機能は、蓄積的に次へつないでいくための前提をなす方略である。なぜなら先行発話を受けとめ、吟味したうえで発話しなければ、先行と後続との関連性が生まれないからである。先行発話を無視し、表出のみに終始していたならば蓄積が不十分になってしまう可能性が大きい。これらの考察を踏まえるならば、話し合いではまずしっかり聴いて受けとめる姿勢が求められると言えよう。

また、仮屋園(2001)でも指摘したように、自分の発話が周囲の他者からしっかりと受けとめられたという体験は他者への信頼感を育む。情緒面に関して、こうした他者への信頼感と同時に育まれるのは、先述のように他者への関心ではなかろうか。すなわち、受けとめる姿勢は他者への関心があって始めて生まれると言える。人の心は人と人とのやりとりを通して育まれる。自分にはない精神機能を人と交わることによって自己のなかに内在化し、心の器が大きくなっていく。これに連動するかたちで、心の器が大きくなった個人が属する集団の器も大きくなっていく。他者への関心とは、こうした心の成長に不可欠な、人との交わりのための前提となる。

こうした他者への関心は話し合い体験によって育むことができると言えるのだろうか。仮屋園(2003)が行った小学校複式学級での結果からは、話し合いの当初、特定の下学年の児童への発話がほとんどみられなかった上学年の児童が、回を重ねるにつれて次第に増加した、という現象がみられた。こうした現象の背景には複数の要因があると言えるが、物理的に同じ集団で話し合いの回を重ねていくうちに、当初はみられなかった特定の他者への関心がみられるようになった、という解釈も可能であろう。この点については、児童を対象としたデータを今後さらに蓄積していく必要がある。もし、当初はみられなかった特定の他者へのはたらきかけが、話し合い経験によって増加していく傾向が今後みられるのであれば、話し合い体験が他者への関心を喚起する機能をもつ、ということが指摘できるであろう。

2. 実用機能分析の結果と考察

個々の発話の実用機能の出現頻度を Figure 13にまとめた。この分析によって、話し合いの蓄積をとおした個々の実用機能発話の増減が明確になり、各回の話し合いの特徴を把握することができる。Figure 13からわかる最も大きな特徴は、同意の増加と説明の減少であろう。同意発話は、同意請求、方針確認を受けとめる発話である。こうした受けとめ発話が増加したことは、これまでの分析結果と一貫性をもつ。複数の分析に同じ傾向が現れているという意味で、受けとめ機能の増加は本研究の重要な結果であると言えよう。

説明発話の減少は、3回ともに同じ種類の課題が続いたことで、説明を要する部分はすでに共通理解が成立するようになり、説明が省かれても話し合いが展開するようになったと言えよう。

また全体をとおして最も多い発話は発案であった。これはいわば積極性の表出であると捉えることができよう。

		第1回	第2回	第3回
(方略)	プランニング	12	6	15
	転換	3	3	6
	方針確認	5	5	4
(主張)	発案	27	20	30
	説明	22	14	2
	挙手	2	5	6
(問い尋ね)	呼び掛け	0	0	2
	念押し	1	0	0
	問い直し	1	0	0
	問い返し	0	1	0
	情報請求	3	3	5
	同意請求	5	7	3
	判断請求	0	1	0
(受け答え)	繰り返し	2	0	1
	言い直し	1	0	0
	情報提供	3	2	4
	応答	1	0	1
	同意	6	14	13
	補足	9	9	7
	意味付け	1	0	1
	否定	9	11	2
(態度)	不満	0	0	1
(対自己)	検索	5	2	2
	自己発話の評価	1	0	0
	aha体験	0	0	1
	同調	3	0	0
(かき乱し)	連想的逸脱	7	10	10
	完全逸脱	0	9	0
(総括)	集約	1	3	0
	終結	0	2	3
	部分的終結	1	1	1

Figure13 各実用機能発話の出現頻度数

	第1回	第2回	第3回
対全体発話数	53 (58.9%)	46 (60.5%)	52 (71.2%)
対個人発話数	34 (37.7%)	30 (39.5%)	18 (24.6%)
対自己発話数	3	0	3
発話数の合計	90	76	73

注.1 発話数の合計は逸脱発話を除外した 注.2 かっこは発話数の合計に対する割合

Figure14 3種類の発話対象

3. 発話対象分析の結果と考察

個々の発話が向かっている対象（相手）の分析を行った。これを発話対象と表記する。発話対象は発話者の意識のありようを表す。つまり、発話方向は自分の意識のなかにある対象に向かうのである。したがって、特定の相手だけが自分の意識にある場合には、その相手に発話が向かう。一方、成員全員、あるいは集団そのものを念頭においている場合は、集団成員全員に対する発話となる。ここまで一貫してみられた結果に、同意発話の増加現象があげられる。本研究ではこの現象を受けとめ機能と解釈した。同意、受けとめは成員全員によってなされる。したがって、発話者が成員全員による同意、受けとめを体験するにつれて、発話者自身の意識の器も広がり、特定の相手から成員全員へと向かっていくことが予想される。仮屋園ら（印刷中）が行った小学校複式学級の結果からは、発話対象が特定の相手から集団全体へと広がっていくことが確認されている。これらのことを踏まえると、発話対象は、回を重ねるにつれて、特定の相手から成員全員へと変化していくと考えられる。

発話対象の分析結果を Figure 14に示した。分析手続きは以下のとおりであった。まず発話対象を対全体、対個人、対自己の3種類に分類した。その際、実用機能に基づく逸脱発話を除外した。この方法で3種類の発話数と発話数全体（逸脱発話を除く）からみた割合を算出した。

Figure 14の各発話対象の発話割合に注目すると、対個人向けは減少し、対全体向けは増加していることがわかる。これらの結果から発話対象に関する上記の仮説は支持されたとと言える。

また、本研究結果は、仮屋園ら（印刷中）の研究結果とも一貫性をもつことが示された。このことから、発話対象の変化にもとづく発話者の意識の器の広がりには、ほぼ安定的な現象であると思われる。こうした結果の一般性、安定性に関する検証について、筆者は以下のように考えている。すなわち、これまでの一連の仮屋園らの研究は事例研究であった。それだけに結果の一般性については慎重を期す必要がある。そこで、結果の一般性、現象の安定性の検証は、個々の研究で結果の一

貫性を比較し、結果の一致がみられるか否かを確認することによって行いたい。

成員の意識が個人から集団全体へと広がっていく現象は、話し合い体験の重要な意義となりうる。なぜなら、こうした意識の広がりには集団全体のことを考える、という視野の広がり、個人の器の広がりにつながると言えるからである。

4. 助詞分析の結果と考察

表現面からの分析として発話に含まれる助詞の分析を行った。これは発話の末尾にきた助詞の種類と出現頻度を算出したものである。助詞の分析のねらいは終助詞の分析にある。なぜなら、終助詞は発話者の多様な心の状態を表すことが知られているからである（綿巻，1997；山森，1997）。とりわけ、「ね」と「よ」は発話者の態度を表明する機能をもつ。「ね」は共感獲得表現助詞で、自分への共感を他者から得ようとする欲求を表す。一方、「よ」は言い聞かせ、主張を表す（綿巻，1993）。この2つの終助詞の機能分析から、話し合いにおいて各成員がもつ心のありよう、および話し合い集団そのものがもつ情緒面の特徴を浮き彫りにすることができると思われる。このような理由でここでは「ね」と「よ」の出現割合に注目する。

Figure 15に、発話の末尾に出現した助詞の頻度、および発話の末尾にきた全助詞に占める「ね」と「よ」の割合を算出した。これら2つの終助詞の全助詞に占める割合は、回を重ねるごとに「ね」が減少し、「よ」が増加している。

「ね」の減少は以下のように解釈できる。すなわち、話し合いの当初は、各成員に他者に対する遠慮があった。他者に自分の意見を受容してもらえるか否かが判然としなかったのであろう。こうした段階は、お互いが探り合う状態である。そこで他者の受容、共感を得ようとする終助詞「ね」の使用が増加したものと思われる。

一方、回を重ねるごとに「よ」の割合は増加した。これは各成員が集団のコミュニケーションスタイルがわかってきたことを示している。集団のなかに同意や受けとめ機能が生まれ、集団内の他者が受容的、許容的な姿勢であることが各成員に判明してきたのであろう。同時に集団内につながり意識や信頼関係が生まれた。そしてこのことによって、積極的に、あるいは自由に自らの意見を表出できることが各成員にわかってきた。主張の終助詞「よ」の使用割合が増加した背景にはこうした要因があると言えよう。

ただし、仮屋園ら（印刷中）では、「ね」、「よ」ともに、その使用割合が回を重ねるごとに増加していた。「よ」の増加は一致しているが、「ね」の結果は一致しなかった。「よ」の増加に関しては上記の解釈が適用できると思われる。一方、「ね」に関しては、本研究と仮屋園ら（印刷中）との研究の違い（対象学年、同年齢集団と異年齢集団）を考慮する必要もあろう。同時に、成員が、どのような意識で共感や受容を得ようとしたのか、という部分を探る必要がある。集団の各成員間にある、これまでの日常的な関係のあり方が反映されている可能性もある。本研究も仮屋園ら（印刷中）の研究でも、親密度といった成員間の日常的な関係のあり方は考慮しないで集団を編成している。成員間の関係のあり方や成員個々の性格的特性によって、編成される集団の性質も変わる。

	第1回	第2回	第3回
<出現した終助詞>			
ね (共感獲得表現)	8	4	2
よ (主張)	21	25	27
か (疑問)	4	9	6
の (質問)	9	4	2
て (依頼, 命令, 要求)	2	0	0
ない (否定, 勧誘)	2	1	0
な (感嘆, 感動)	0	2	0
け (回想)	1	0	0
ぜ (念押し)	1	0	0
なあ (願望, 感動)	0	1	0
計	47	46	37
逸脱発話	6	8	4
逸脱発話を除く発話の 終助詞の合計出現頻度	41	38	33

Figure15 - 1 終助詞の出現頻度数

	第1回	第2回	第3回
終助詞「ね」の出現頻度数	8 (19.5%)	4 (10.5%)	2 (6.0%)
終助詞の頻度数	41	38	33

注：逸脱発話を除いた発話の「ね」の数を用いている

Figure15 - 2 終助詞「ね」の使用率

	第1回	第2回	第3回
終助詞「よ」の出現頻度数	19(46.3%)	18(47.3%)	24(72.7%)
終助詞の頻度数	41	38	33

注：逸脱発話を除いた発話の「よ」の数を用いている

Figure15 - 3 終助詞「よ」の使用率

今後、こうした点を考慮に入れたデータも必要になるであろう。

まとめ

本研究のねらいは、児童を対象とした話し合い場面での中核的発話連鎖を浮き彫りにし、そのコミュニケーション・モデルを構築することであった。その意義は、問題と目的で述べたように、モデル構築の過程で、共通理解を中心とした洗練された話し合い形成に至る変化の実相を把握し、児童が学び、身につけていくものを読みとる、という点にあった。

モデルの形成過程およびエピソードの終了分析の結果から、洗練されたコミュニケーションには、先行発話をしっかりと受けとめ、収束させる機能、および特定話題の合意を次へつなげる渡し機能が必要であることが明らかになった。そして話し合いのなかでこの2つの機能が十全に働いていることが共通理解を形成する土台になると考えられる。

同様な傾向は、末節連鎖出現理由の分析からも読みとれた。すなわち、末節連鎖の主要な出現理由は、先行発話を受けとめることなく、無視するという行為にあった。さらに実用機能発話の分析からも、回を重ねるごとに同意発話が増加した。同意は受けとめ機能をもち、こうした発話の増加も上記の結果を裏づけるものと言える。

引用文献

- 仮屋園昭彦・丸野 俊一・綿卷 徹・安楽 朋陽 印刷中 複式学級に属する児童の異年齢集団による継続的話し合いの変容分析 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 14.
- 仮屋園昭彦・川野浩太郎・綿卷 徹・丸野 俊一 2004a 議論過程における一般協同問題解決方略の有効性 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 55, 195-267.
- 仮屋園昭彦 2004b 議論過程を捉える枠組みとしてのオートポイエーシス理論の有効性 鹿児島大学教育学部研究紀要 人文・社会科学編, 55, 147-157.
- 仮屋園昭彦 2003 特認校複式学級に属する児童の異年齢集団による継続的話し合い活動の分析 鹿児島大学教育学部教育実践研究紀要, 13, 157-168.
- 仮屋園昭彦・丸野 俊一・加藤 和生 2002 協同問題解決型議論の学習効果 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 53, 255-291.
- 仮屋園昭彦・丸野 俊一・加藤 和生 2001a 情報統合型議論過程の解釈的研究 鹿児島大学教育学部研究紀要 教育科学編, 52, 227-257.
- 仮屋園昭彦 2001b 協同的問題解決 認知心理学を語る 3 おもしろ思考のラボラトリー 北大路書房 Pp. 35-55.
- 仮屋園昭彦 1999 協同学習 パースペクティブ学習心理学 羽生義正(編) Pp. 198-203. 北大路書房
- 中山 元 2004 ほくと世界をつなぐ哲学 筑摩書房
- 佐々木正人 1994 アフォーダンスー新しい認知の理論 岩波書店
- 綿卷 徹 1988 ダウン症児と大人の会話的相互行為の予備分析 京都国際社会福祉センター紀要 発達・療育研究, 4, 3-15.
- 綿卷 徹 1997 自閉症児における共感獲得表現助詞「ね」の使用の欠如 発達障害研究, 19, 146-157.
- 綿卷 徹 1993 日本語MLU計算のための発話分析ガイド第2版 発達障害研究所
- 山森 良枝 1997 終助詞の局所的情報処理機能 谷泰(編) コミュニケーションの自然誌 新曜社